

大陸（北支）

戦争と新兵教育

鳥取県 日置 栄

大正十五年四月生まれ、満十九歳の私は中国北京区管内の豊台駅に勤務しておりました。昭和二十年二月一日、北京において兵隊検査を受け、四月一日付で、山東省済南警備隊である北支派遣軍衣第三〇四〇部隊、独立歩兵第一〇九大隊へ現地入隊をしました。大隊長は坪井少輔大佐で、第三中隊長は渋谷中尉、教育隊教官は宮園少尉でありました。

我々新兵は営庭において訓示を受け、各教育班に分けられた。軽機関銃班五十名、小銃百名で二個班、擲

弾筒班五十名、衛生兵ほかが五十名、各教育班長と助手も決まりました。

次の日から毎日毎日の訓練が始まり、四、五、六月と苦しかったが、検閲までアツという間であった。六月に入った頃、大隊本部はダンテンという所に駐屯していた。我々も訓練のため行ったり来たりしていて、その営庭では何回も検閲練習もやった。

その頃はダンテン飛行場に毎日決まった時間に空襲があつて、警報がある度に我々は蛸壺壕に跳び込む。やれやれと思っていると、とたんにガラガラガラと大音響と共に兵舎の煉瓦が崩れる音。ブシューブシューブシューと雨霰、土煙を立てて壕の上を弾丸が飛び過ぎて行く。一メートル近くに銃弾が突き刺さり生きた心地がしなかった。そんないろいろの体験などがあつ

たが無事に一期の検閲が終わって、いよいよ各中隊に配属ということと、近く教育討伐があるらしいという話を聞いた。

突然、中隊も教育隊も移動があり、山岳地帯のある部落に移った。その日の夕方、山の向こうの敵地区に、我が分哨の重機関銃で射ち落とされた飛行機を取りに行くのだという。昼間の疲れもそこそこに、三日間の食糧と弾薬を受領し、夜になるのを待って完全軍装の身支度で出発した。

岩山路を上がって行く、歩兵砲も分解し駄載し、重機関銃も苦勞しながら前に行く。我々教育隊も後を着いて行く。時々話が伝えられる。飛行機の落ちた現場まで十五、六里あり、夜明けまでに到着する予定の強行軍になるとのこと。

また、敵の共産八路軍は、山の向こうに三万いるといわれ、友軍は三、四個師団が動くという話も流れてくる。古兵や班長が話すのを聞きながら黙々と歩く。遅れないように山を越え谷を渡る。河に架かる橋は丸太で、その度に隊列が淀む。兵隊はほんの少しの待つ

時間でも銃を杖に、立ちながら眠っている。

前進開始、ゴッンと前の兵隊の鉄兜にぶつかり、ハッと気が付き少し前進、また止まる、繰り返しながら下っていくならかな傾斜地。上は畑の坂道で「小休止」の号令、何時頃か時計もよく見えない。歩き疲れているから皆背囊を背負ったままひっくり返る。銃を腕に抱きながら、一寸の間も眠る。十数分もしないうちにまた歩く。靴が重い、足は我が足ではなく棒のようだ。

黙々と歩き続けて、東の空が少し白む頃だった。犬の遠吠えが聞こえて、集落が近いと思った。暫く行って集落に入ると、先発隊は畑や空地に銃を立てて休んでいる者、忙しく動いている者、少し明るくなって人影がはっきりしてきた。

我々も中に入って行く。土塀や家屋の並ぶ集落を通り抜け、畑の中で休憩になった。朝食を取ることになり自分は水汲みの当番、集落の中に井戸があるというので奥に入ってしまった。其処では四、五人の兵が二人の中国人を前に尋問していた。一人が「昨日までの中

国軍は何処へ行ったか、武器は何処に隠したか、白状しろ」と銃の床尾でこづいて聞いている。別の一人が女、子供の面前で「言わぬと殺すぞ」と言いながら、銃剣で突っ突いたようだ。彼等是一緒に大声で泣きわめいていた。

私達新兵は見て見ぬ振りして通り過ぎた。奥へ行くと、ちょっとした広い所があって、巻き揚げつるべの井戸がある。四、五人待っていて、右側の戸板の台で黒豚を料理している。反対側の家では老婆と小さな子供が、血のついた豚の頭を撫でながらオイオイ泣いていた。

考えてみれば酷なことをしたものだ。「ヤンツ（赤鬼）が来れば十年の不作だ」と、中国人は言った。その通りだったであろうと思う。麦畑は踏み荒らされ、家族の面前で親父は死ぬ程の目にあわされる。家畜は取られる。戦争だから仕方ないとはいえ、一生忘れることはないだろう。我々はこうした中で一人前の軍人になって行く。

食事が済んだ頃、伝達があって、先発隊の任務が終

わったので引き上げていく。また、山を越えて、昼も過ぎた頃、わいわい大声をする苦力（中国の労務者）の集団に追いついた。ぞろぞろと、何本もの棒をさして担いでいる。しかし担いでおろのか、ぶら下がっているのか、触っているだけなのか大勢である。

急斜面にさしかかった時、大声があがった。二、三人深い谷にずり落ちて行った。荷が傾く度に肩に食い込み大声があがる。

道は狭い、離れるなと怒鳴りながら、苦力の腰を銃尻で突っ突きながら怒鳴る。落ちた連中を助けにも行かせない。苦力のジャングイ（労働者の親方）は頭張れ頭張れと声をかけている。

少し平らな所で休憩になった。何処で都合つけて来たのか、彼等にも玉蜀黍の粉で作った饅頭が一個ずつ配られた。朝食も抜きで腹が減って動けぬ「少なすぎる」と不平を言っている。

我々も乾パンと水で過ごし、苦力が担いでいた物を交代で見る。飛行機の残骸でエンジンと十一ミリ砲が眼についた。プロペラの回転の間から弾丸が飛び出す

のだという。このP51型戦闘機（カーチスホーク）は日本の飛行機より新兵器だそうだ。

暫くして、そろそろとまた出発、夕暮れになって山を越えた。此の地方は治安地区とあって、教育隊へ別れて宿营地へ帰った。その後、四、五日たって各中隊へ配属。私はそのまま第三中隊の第三小隊、小隊長は小林少尉だった。同郷の大江君は第二中隊へ行った。或る戦闘で第二中隊は殆ど玉碎したので各中隊より補充し編成されたのだという。

その日の夕方は、黄土の小高い台地で黄崖という集落に着いて、民家の土間にアンペラを敷いて寝ることになった。夏の夜のことで蚊が多く、煙でいぶり出して横になったが中々眠れない。

次の日は、午前と午後一回ずつ歩哨に立つだけ、洗濯も水が無くて出来ない。夕暮れに山の方でドッカンと爆発音、皆武装して飛び出した。「三小隊」と呼ぶ、班長と共に走る。しばらくすると前から声があり、「大事無し、各隊帰って待て」「情況は後程連絡する」ということで、帰って待ったら、敵襲でなく、古兵が

手榴弾を腹に抱いて自殺したという知らせがあった。

一時間程たって集合がかかった。部落の外の畑に集められ中隊長の訓示があった。上等兵が帯剣を止める止鉄が無くなり、剣の鞘を落としてしまった。上等兵は補充兵で気が弱く、毎日がつらいと言っていたそうだ。上官より「天皇陛下より預かった大切な兵器を何と心得ておるか。戦いが終わったら貴様は重営倉入りだぞ」と言われ、それを苦にしたらしい。

隊長は「罪は罪だが、その前に国家のためにしっかり奉公せよ。こうした死に方をしては戦死にも、戦病死にもならない。内地で待つ家族も不名誉の誹りを受けねばならぬ。諸兵等このような不心得をおこさぬよう」ということであった。

次の朝から、古兵を茶毘に付すため、皆で薪を集めることになった。我々も燃える物を求めて古兵隊と共に村の中へ入って行く。各家を捜していると、動く者がいた。古兵は大声で誰何、剣を突き付けながら「セイヤー（誰か）」、中から老人が「助けてくれ、これをやるから助けてくれ」としきりに哀願、袋の様な物を

持っている。

自分が少し聞いてみたら、日本軍が来るというので、皆逃げたという。俺は老人で逃げられなかったので、これを残して貰った。「さあ持って行け」と、また袋を差し出す。古兵は、何か宝物でも入っているのかと思つて、ひたたくつて中を見たら小麦が入っていた。投げかける手から受け取つて、老人に渡してやりながら、どうして食うかを尋ねてみた。「平石に乗せて叩き、水を加えて粘りが出てきたら焼いて食う」と言う。

老人は奥のつづらを開けて、七歳ぐらいの少年を引き出して「二人を助けてくれ」としきりに頼む。子供は流れ弾で足をやられ、びっこを引いており老人が助けて介抱をしたと言う。老人はまた先の袋を持って行けと言う「チウハン、ラマ（飯を喰ったか）」と言うのが中国人の日常の挨拶だから、彼等にとっては、今は命の次の袋だ。

我々は「そんな物は不用、燃える物が欲しい」と言つたら、机や椅子を指して何でも持つて行け」と言う。自分と古兵は、置き去りにされた老人や少年に

「貰つて行くぞ」と言いながら担いで出た。

広場には、天幕にくるんだ古兵の亡骸の上に、燃える物を何でも積み上げていた。農具や窓枠、戸、机、椅子、家の梁、アンペラの敷き物、手当たり次第。夕方近く、油をかけて火がつけられた。我々戦友は順次屍衛兵に立哨した。自分も真夜中頃になって立った。青い炎を見ながら、警備隊のことを思い出し、気の毒な人だなとつくづく思った。

訓練は討伐の間にも続けられていた。ある日千佛山へ向かつて匍匐前進、米軍を中国大陆へ迎え討つのだという対米戦に備えて、古兵と上等兵は前から大声で怒鳴る。「頭が高い」「敵弾雨霰」などと言いながら砂利をぶつつける。前に出した腕の銃が重い。鉄帽も重い。まして自分は擲弾筒の弾薬手で、両脇の弾入れが気にかかる。

突然、班長の号令「筒手戦死」「交代」自分は銃を背に前に出て擲弾筒を取った。筒を腰に、片ひじで這う。「筒手、射ち方用意」急いで姿勢を変えて弾を入れ、引鉄に手をかけようとしたらさあ大変、引鉄が無い、

捜しに帰りかけて班長、教官に報告。全員直ちに集合、二列横隊で各班共に並んで探した。昼食も抜き、夕方になるまで、何回も何回も繰り返したが止環だけはどうしても見付からなかった。

引鉄や止鉄心棒はどうにかあった。また明日にということで班内に帰った。上等兵と古兵に兵器の大切さについてお説教が始まり、班内全員の責任だ。たるんでいると、我が班はさんざん絞られた。その最中に飯（めし）上げがあり炊事当番だけは行った。食事を持って帰って来ても配膳させず皆腹が減って気持ちが悪く、うわずいておるのに気付いた上等兵は、大声で「当番炊事の残飯入れにめしを移して来い」と言い古兵に眼くばせした。彼が監視役についていった。

室内はしゅんとしている。説教は続く、消灯近く班長が来られ「シャワーを浴びて早く用事を済ませて床に付け」と言っ下士官室へ。やがて消灯になったが寝付かれず厠（便所）へ行くふりして水飲みに出て行く者もいる。暫くすると昼間の疲れで寝入ったか静かになった。

自分はとても寝付かれそうもない。うとうとしていたら古兵が呼びに来られた。下士官室へ行く、当然、営倉入りか懲罰があるものと思いつながら立っていた。軽機関銃の班長、小銃の班長は日報か何か書いておられる。皆伍長だが、我が擲弾筒班の秋葉班長だけは一選抜の兵長さんである。暫くして上等兵が入って来られた。

兵長は「オオ茶谷上等兵。呼び出して済まんなあ」「何ぞあったか秋葉」「擲弾筒の止環都合つけてくれや」「オー判った」と言っ出て行くと、入れ代わりに古兵が、飯盒をさげて入ってきて「オイ秋葉、夜食の差し入れだ」「遠藤、何時もすまんのう」と言いながら振り向き「空いた所へ掛けいや、もう直ぐ茶谷も来るぞ」「ほう珍しいのう」といいながら椅子にかけると、どの班長も古兵を見て「何時もすまんのう」と礼を言う。茶谷上等兵も遠藤一等兵も、上級の秋葉班長を呼び捨てである。自分は不思議に思っていたら、後で判ったが皆同年兵で、しかも北海道北見国の同郷だった。

茶谷上等兵も来られて、飯盒の物を食べながら一時話に花が咲いた。自分は腹の減ったのも忘れて皆の話を聞きながら角の方に立っていたら、古兵さんが気付いて、「オイ、コイツどうした」と尋ねて下さった。茶谷上等兵はポケットから机の上にポロリと、環を出す。班長が取って「日置、班内に帰って付けて来い」と言われた。「はい」と受取り班内に帰り擲弾筒に止環を付けた。

十四、五分もかかったか恐る恐る下士官室へ帰って行ったら「おいこれを食べって飯盒を洗って来い」と言われた。班長の言われた通り有り難く喰った。小豆の甘い汁粉だった。各班長等は「お先に」といいながら寢室に帰って行かれた。残った同年兵の北海道組はまだ話をしておられた。

上等兵が「日置、教育中で良かったのう。心配するな、本番はそうはいかんど、友軍がたくさんやられるかも判らん」といい、遠藤古兵も「教育中は許されんが、戦闘中はもう応用だ。針金でも、釘でも拾え、回りに無ければ服のホックでもむしって間に合わせ、頭

を使え。なあ日置覚えておけ」と教えて下さった。

秋葉班長も機嫌が良く、笑いながら国は何処かなど聞いて下さって、お前も早く良い戦友を作れ、俺たちは同年兵の同郷人で心強いぞ、と話され、また「今日はたまたま日置がきっかけを作ったが、戦闘中は二日や三日は飲まず喰わずで戦わねばならぬこともある。教育中に体験実習が出来て良かった」と言って笑っておられた。翌日、教官からもその様な訓示があった。

「昨日のことは、きっかけはどうであれ、教育中の予定の一つである」と教育隊長の言葉だった。

古兵、上等兵の話の後で、下士官室に引つ張られた時、てっきり罰を受けると覚悟していた。皆腹を減らして一夜を過ごしたが、大して叱られもせず馳走になりながら許されると感じた時、涙が出そうだった。いや甘い汁粉の中に涙が落ちた。

そんなことがあってから、自分はよく下士官室へ出入りした。どの班長も覚えて声をよくかけて下さった。班長の下着や靴下を取り替えに行って洗濯をした。「ついでに」といって伍長さんのもの頼まれた。

要領を本分とすべしの連中が大勢いて、班長、古兵

と演習から帰ると、巻脚絆取りから、洗濯物まで先を競ってやったが、秋葉班長だけは何故か自身でやるか、私のみにやらせた。少しは他の者にも頼めば良いのになと思つたこともあったが、教育がそろそろ終わりに近い頃、班長はポツリと言われた。「日置お前は感心だ、誠意があつて良い。他の者は員数で駄目だ。濯ぎが悪くつて石鹼が残つておつて靴下はぬるづく、下着は臭い、衿など特に残つておるでなあ」と。

そのことがあつてか、入ソして捕虜の生活の中で三か月もの間、マラリアで熱が出て自分が苦しんでいた時、秋葉さんが世話をして下さつた。今日あるは彼のお陰と有り難く感謝しています。

【解 説】

執筆者日置さんは、本文にあるように大正十五年四月生まれ。大正十三、十四年生まれの方は、昭和二十年兵隊検査を受けるのだから運が悪いというか、大東亜戦争最後の兵とし、北支豊台駅勤務のためか入隊し

たので、珍しいことである。

衣第三〇四〇部隊とは、元独立混成第十旅団で、昭和十七年二月二日第五十九師団に改編（北支那方面軍、第十二軍隷下）された。改編前は、独立歩兵第四十一、四十二、四十三、四十四、四十五の五個大隊編成であつた。

執筆者入営時の師団長は、陸軍中将藤田茂であり、執筆者はその隷下、歩兵第五十四旅団、旅団長長島勳少将であり、独立歩兵第一〇九大隊長は坪井正佐大佐（陸士二八期）であつた。

師団は、終戦前、関東軍が主要兵力を南方、内地へと転出させたため、支那派遣軍から数個師団が関東軍に編入された。その中に第三十四軍隷下第五十九師団があるので、師団司令部の最後の駐地は北鮮成興であり、ほとんどの兵員はシベリアへ抑留されている。

手記の内容は、真面目な日置氏の若き初年兵教育中の教育、警備であるが、初年兵教育重点、特に軍人の家庭たる兵営生活等につき軍隊内務（書）令について述べてみる。

軍隊内務令制定理由

現行軍隊内務書 昭和九年の改訂ニ係リタルモノニシテ支那事変及大東亞戦争ニヨリ著シク變化シタル軍隊ノ実情ニ鑑ミ改正ヲ要スルニ至レリ而シテ之ガ制定ニ当リテハ現代戦ノ特質並ニ軍備ノ拡大充実ニ伴フ編制制度ノ改正、將兵素質ノ変遷、駐屯地域ノ拡大變化等軍隊ノ現況ニ即応セシメ且將來ノ趨向ヲモ參酌シ左ノ点ニ留意セラレ又軍令ノ本質ヲ明ラカナシムル為軍隊内務令トシテ新制定ノ形式ヲ採用セラル

一、天皇親率ノ大義ヲ一層明徴ナラシムルコトニ就テ

二、精神要素ノ陶冶鍛練ヲ重視スベキコトニ就テ

三、作戰部隊ノ適用ニ就テ

四、編成制度ノ改正、駐屯地ノ極寒、酷暑ノ地ニ互リタルニ伴フ事項ニ就テ

五、健兵対策、防護、防空ニ関スル事項ニ就テ

六、從來ノ経験ノ參酌シタル事項ニ就テ

七、章條ノ整理ニ就テ

軍隊内務書とは何を規定するかはその第一章総則に次

の如く示されている。

第一 本書ハ陸軍軍隊ニ於ケル各官ノ職責及内務ニ関スル事項ヲ規定ス官衙、学校等ニ在リテモ亦之ヲ準用スルモノトス：

改正された軍隊内務令にも第一章総則には次の如く示してある。

第一 本令ハ陸軍軍隊ニ於ケル聯隊長以下ノ職責及内務ニ関スル事項ヲ規定ス但シ作戰部隊ニ在リテハ作戰、警備ニ妨ナキ限り之ヲ適用スルモノトス
要は、聯隊以下の職責及び内務に関する規定であるが、内務書は明治四十一年制定、昭和九年改正であるから、概ね今次大戦前のものである。大部分の者（大東亞戦後期を除き）は軍隊内務書で教育され規正されていた。その綱領の三について、内務書と内務令を比較してみる。

・軍隊内務

「兵營ハ苦樂ヲ共ニシ死生ヲ同ウスル軍人ノ家庭ニシテ兵營生活ノ要ハ起居ノ間軍人精神ヲ涵養シ軍紀ニ慣熟セシメ鞏固ナル團結ヲ完成スルニ在リ」

・軍隊内務令 綱領三

「兵營ハ軍人ノ本義ニ基キ死生苦楽ヲ共ニスル軍人ノ家庭ニシテ兵營生活ノ要ハ起居ノ間軍人精神ヲ涵養シ軍紀ニ慣熟セシメ鞏固ナル團結ヲ完成スルニ在リ」

両者の大きな相違点は「軍人ノ本義ニ基キ」が令に入っていることである。軍人の本義とは、綱領第一「軍ハ天皇親率ノ下ニ皇基ヲ恢弘シ国威ヲ宣揚スルヲ本義トスル」のことで、前述「内務令制定理由」にある、現代戦に即応と同時に「軍令ノ本質ヲ明ラカナラシム」が「天皇親率ノ大義ヲ一層明徴ナラシム」となるのである。軍人の家庭で、このことを基本とさせたのである。

・内務令総則 第四

「内務ハ有ユル軍務ノ素地ヲナス故ニ其ノ実施ニ當タリテハ戦陣ノ要求ニ適応セシムルト共ニ教育訓練ト表裏一体タラシメ特ニ精神要素ノ陶冶、鍛練ヲ重視シ且不斷ノ浸透セル監督指導ヲ為スコト緊要ナリ」

次に綱領中より、下士官、兵、兵營について抜粋列記する。

十一 下士官ハ兵ト起居ヲ共ニスルモノナルヲ以テ其ノ举止言動ノ之ヲ感化スルコト特ニ深甚ナルモノアルヲ思ヒ己レ先ヅ命令法則ヲ遵守シテ服従ノ道ヲ守リ行状ヲ慎ミ態度服装ヲ正シ懇切公平ヲ旨トシ躬行以テ之ガ善導ニ勉ムベシ

十二 兵ハ一意専心上官ノ教訓ニ遵ヒ思想正順ニシテ克ク其ノ本文ヲ自覚シ命令規則ヲ嚴守シ軍務ニ勉励シ常ニ筋骨ヲ鍛練シ百折不撓ノ心ヲ養ヒ以テ軍人ノ本領ヲ完ウスベシ

十三 兵營ハ軍隊成立ノ容義ニ基キタル戦陣起居修練ノ道場ナルモ国民タルノ道義ト操守トニ至リテハ軍隊ニ在ルガ為ニ其ノ趨舎ヲ異ニスルコトナシ故ニ在營間ノ教養ハ皆ニ全服役間ヲ通ジテ軍人ノ本文ヲ完ウスル緊要ナル基礎タルノミナラズ亦以テ国民道德ヲ涵養シ終世ノ用ヲ為スベキ習性ヲ賦与スルニ至ルベキモノニシテ軍人ハ帰郷ノ後ト雖モ永ク此ニ由リテ各自ノ業務ヲ励

ミ忠良ナル国民ト為リテ自ラ克ク郷党ヲ薰染シ
以テ国民ノ風尚ヲ昂上セシムルヲ得ベシ

十四 各級幹部及兵克ク前記ノ趣旨ヲ体シテ各々其
ノ分ヲ尽クサバ兵營ハ一大家庭ヲナシ融々和楽
ノ間其ノ團結ヲ鞏固ニシテ上下相敬愛シ緩急相
救モ有事ノ日欣然トシテ起チ勇奮死ニ赴クラ楽
シムニ至ルベシ是レ實ニ軍ノ本義ヲ顯彰スル所
以ノ道ナリ

体験記執筆の日置氏は極めて厳しい内務班において
班長の温情に接したのであるが、「緩急相救い」が私
情、私怨をもった私的制裁により多くの下級者を苦し
めたこともあった。

しかし「有事の日欣然勇奮死に赴く」ことが当時の
全軍人に課せられたことは、現在の平和時に教育され
た者に理解を得ることは困難であらう。

北支派遣軍

内蒙古でのめぐり逢い

愛知県 杉浦寛弥

臨時召集で昭和十三年一月十日、豊橋歩兵第十八連
隊入隊のため、氏子神宮で盛大なる見送りを受けた。

親戚の杉浦義衛伍長が応召して、北支派遣後宮部隊千
田隊で活躍中と聞き、その親戚の方から「もしかして
逢えるかも知れません、もし逢えたら宜しくといって
下さい」といわれました。皆様にお別れして無事入隊。
三月六日、北支派遣要員として屯営を出発、三月十五
日北支北苑に到着。

内蒙派遣常岡部隊稅所隊伊藤小隊に編入。四
月一日北苑出発、北京着、二日宣化着、第一期検閲を
受ける。

旅団本部は張家口、中隊は陽高と決定し、四月二十
四日陽高に到着、警備任務に着く。